【温泉街別府】（八）「明礬湯の花小屋」

別府温泉郷は、別府市内に点在する８つの温泉地で構成されているが、八湯の一つ明礬温泉は伽藍岳（標高 1045 メートル）という山の中腹にあり、八湯の中でも標高の高い場所にある。伽藍岳は別名、硫黄山とも呼ばれ、その字の通り明礬温泉は硫黄泉で知られている。別府八湯の中でも、とりわけ薬効が高いとの評判で、この地に一歩足を踏み入れると、あの独特な硫黄の匂いに包まれる。

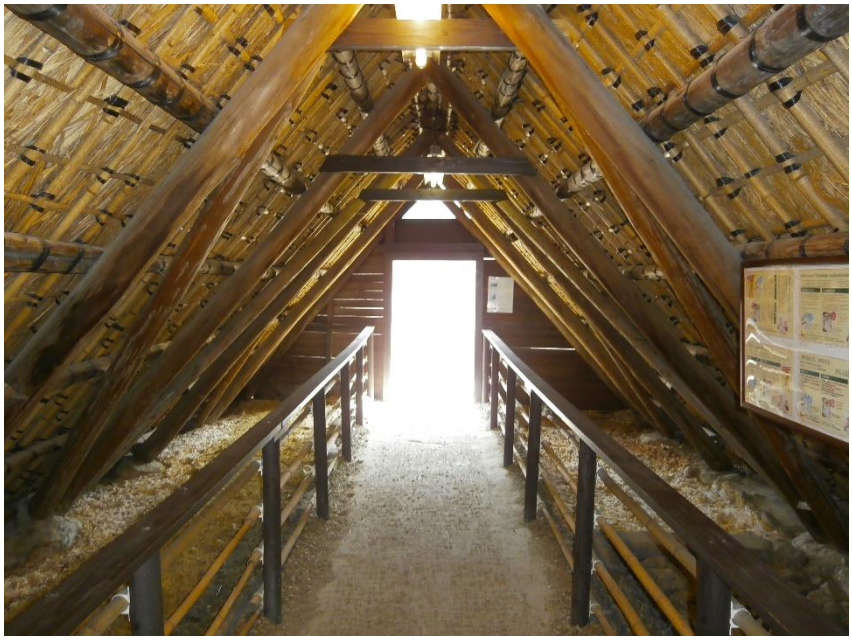
明礬温泉には宿泊できる旅館もあれば、日帰り入浴できる施設もあり、中でも有名なのが「岡本屋」で、140 年続く老舗の旅館。旅館に併設されている青磁色の露天湯が人気で、青い湯の中に体を沈め、青い空を見上げると、とても爽快な気分になる。また「別府温泉保養ランド」という施設は立ち寄り湯で、別府でも珍しい露天の泥湯があり、日本全国からこの泥湯を目的に来る湯治客も多い。ドロドロとした泥は肌にすこぶる良く、国内外の有名人が時折訪ねて来るほどだ。

温泉を楽しむだけでなく、明礬温泉の成り立ちを学べる施設もあり、それが「みょうばん湯の里」。1725 年の創業というから、かれこれ 300 年近く当地で存続している老舗中の老舗で、これほど永く続いている企業も大分県内では珍しい。ちなみに老舗企業を名乗るための明確な基準はないそうだが、一般的には創業 100 年以上の企業を指すそうで、民間信用調査機関の東京商工リサーチの調査によると、2017 年現在で日本全国に 3 万 3069 社が存在している。

300 年近くの歴史を持つ「みょうばん湯の里」全景

　また、100 年企業戦略研究所という機関の調べによると、大分県内には 357 社（2021 年現在）あり、「みょうばん湯の里」はその一つ。おそらく、100 年そこそこの企業数が多い中で、300 年の歴史を持つ「みょうばん湯の里」は、大分県内では最も古い企業の筆頭に挙げられるのかもしれない。

見学用の湯の花小屋



見学用の湯の花小屋内部

ところで、明礬温泉という言葉の通り、ここは江戸時代（1603〜1868 年）に江戸幕府の直轄地だった所で、同地で止血剤などの薬や染色剤、顔料などに利用するための「豊後明礬」が製造されていた。製造を一手に引き受けていたのが 300 年近く続く、この「みょうばん湯の里」という企業の先祖に当たる脇儀助という人物で、日本国内の明礬製造と販売の権利を独占していたという。

しかし、明治期（1868 年以降）になると海外、特に中国の明礬に押されて衰退したことから、明礬の製造過程で出来た入浴剤「湯の花」に切り替えて、現在では湯の花を配合した石鹸や全身ジェルなど多種多様な商品を開発して販売、中国や韓国など周辺各国からの問い合わせも多いそうだ。

湯の花というと、日本国内の温泉地では必ずお土産用に販売されているが、「みょうばん湯の里」の湯の花とは製法が違う。全国に数ある温泉地の湯の花は、沈殿物を採取したり、硫黄の塊を粉末にした簡便なものだが、同社の湯の花は、温泉の噴気と青粘土を利用して結晶化させたもので、そのためには「湯の花小屋」という特殊な製造施設が必要だとか。

敷地内に点在する湯の花小屋

店舗内で販売されている湯の花関連商品

日本全国の温泉各地で売られている湯の花とは一線を画し、製造方法の違いをアピールして湯の花の効用・効果を売り物にしている同社。専門の職人を育てながら、製造技術を伝承しつつ現在に至っているそうで、敷地内に点在する小屋も、季節や職人の数によって稼働する数が変わるという。同社が保有する「明礬湯の花製造技術」と「湯の花小屋」は、2006 年に国の無形民俗文化財に選定され、湯の花小屋を訪れる観光客も多い。新型コロナが流行する以前は、

年間 100 万人以上の観光客が訪れ、この中には中国からの訪日客も多数含まれていたが、今では 9 割減。かなり経営も厳しいようだが、湯の花を材料とした新開発の製品で苦境に耐えつつ、来るコロナ収束時を待ち焦がれている。

文/图： 铃木源柱
翻译编辑：JST 客观日本编辑部